

## 第2部 京都を始めとする 近現代日本の地域研究

司会 同志社大学経済学部准教授 奥田以在

**司会** それでは第2部を始めさせていただきます。司会は経済学部の奥田が務めさせていただきます。第2部では「京都を始めとする近現代日本の地域研究」について元同志社人文科学研究所教授で同志社大学名誉教授である高久嶺之介先生にお話をいただき、同志社大学文学部教授の小林丈広先生からコメントをいただきます。高久先生は1976年4月、同志社大学人文科学研究所にご着任され、その後、専任講師、助教授、教授を務められ、2007年から京都橘大学文学部教授。現在は同志社大学名誉教授、京都橘大学名誉教授でもいらっしゃいます。本日は「近畿地域研究の流れ」と題してお話をいただきます。高久先生、よろしく申し上げます。

### 近畿地域研究の流れ

同志社大学名誉教授・元人文科学研究所教授  
高久嶺之介

#### 1 専任研究員になる以前

研究会の流れと自分の研究とを絡ませながら、話を進めたいと思います。

私が同志社大学人文科学研究所の専任研究員になりましたのは1976年4月です。もちろん人文科学研究所はそれ以前から歴史があるわけで、1957年4月に同志社大学人文科学研究所になっておりました。この同志社大学人文科学研究所ができた1957年に吉川秀造商学部教授を代表者とする10名ぐらいの方が「亀岡市馬路町馬路の社会構造の総合調査」という課題で共同研究を開始しております。もちろん私は大学に入る以前で、この馬路の研究は知りませんし、吉川先生も直接面識がありません。しかし地域史研究は最初から研究所にあるんだということで、述べていこうと思います。これらの研究会が進む中で、1963年4月仲村研先生が専任研究員に入られました。

この研究会は亀岡市馬路の研究、そしてそれから北桑田郡京北町山国地方（現在は京都市）の研究と進むわけです。これらの研究は、当時それらの地域から古文書を借りてきて、古文書をもとに研究する仕組みでした（古文書の大部分は研究会終了後返却しました）。この成果は、同志社大学人文科学研究所編『林業村落の史的研究—丹波山国郷における—』（ミネルヴァ書房）という形で出ております。なお、馬路や山国の頃の研究会は1サイクル6年でした。その後1サイクル3年と変わってきています。

## 2 専任研究員になってからの6年間

さて、私が専任研究員になり、最初に担当したのは、歴史学とは直接関係がありません。「地域社会と福祉」という研究会で、

代表者は中條毅先生でした。この研究会は3年目の最後の1年担当しました。ところで、当時「家族制度の比較研究」という研究会（代表者松本通晴文学部教授）がありました。私はこの研究会に所属していませんでしたが、当時担当していた仲村研先生から、今度この研究会から『共同研究 日本の家』という本を出す、ところが「天皇の家」という書き手がないので、高久は日本近代史が専門だから彼にやらせてみたらという声が研究会にあり、あんなやってみるか、という話がありました。私もびっくりしましたが、何とかやってみました。ともかく私の論文はひどい論文でした。あまりにひどいので、その挽回という形でその後皇室の論文を5本ほど書きました。

さて「地域社会と福祉」の次に担当したのが、1977年の「日本経済における地場産業問題の研究」という研究会、代表者が前川恭一先生で、いわば西陣と友禅の現状分析の研究会でした。これは年配と若手がうまく組み合わさった研究会でした。私個人では現状分析の精緻さを体験しました。この研究会は、1982年『和装織物業の研究』（ミネルヴァ書房）を出し、1983年商工組合中央金庫主催第7回中小企業研究奨励賞本賞を受賞しました。私は一切学問的な貢献はしなかったものの、研究会の世話（雑用）はしていましたので、この時は非常にうれしかったです。

この後、1980年「京都地場産業の研究」（代表者笹田友三郎経済学部教授）、同年「近代社会における人権問題の研究」（代表者遠藤彰神学部教授）という研究会の世話を3年間やりました。

### 3 はじめての地域史研究と愛媛

人文研に入って7年目、1983年にはじめて地域史研究、つまり本格的な歴史研究会に入りました。ただし京都や関西を対象にした研究会ではない。愛媛県を対象にした研究会です。「近代地方名望家の研究」（代表者松本通晴文学部教授）というものですが、これは松本先生が愛媛県西条市出身で、愛媛県東予市公民館に1915年（大正4）から1947年（昭和22）までの日記29冊が残されている、しかもこの日記を書いた一色耕平という人物は、大正から昭和期まで24年間町長を勤めた人物（周桑郡壬生川町長）で、足尾鉍毒事件とならぶ近代日本の最大の公害問題である住友別子銅山四阪島精錬所煙害問題での農民側指導者であるということでした。これを研究しようとなりました。しかも人文研の専任研究員が総出で、しかも高久が中心になってやることになりました（「やれるか」と聞かれたとき、つい「やれる」ということを私が言ってしまった手前やむをえません）。

しかし、やりはじめたらちょっと予想はしていましたが、一色の日記はともかくも読みにくい。字は難しいうえに、ともかく内容的にまとまりがない。みんなでよむことはできないので、結局仲村研・杉井六郎・高久の3人で読みました。実情を言うと、仲村・杉井両先生は別の研究会の仕事のため1回だけ、後は私が日記を読みました。

研究会のまとめも初めはどうしたらよいかわからず、私個人は、①町村長は何をしていたのか、②町村長はどれくらい金をもらっ

ていたのか、③町村役場は何人ぐらいで仕事をしていたのか、結局のところ、名誉職町村長の実態はどういうものであったのか、ということで論文を書きました。

この研究会は、参加した方々をひとつの目標にまとめるという意味では失敗でした。しかし私個人が問題意識を進化させていく上では明らかに勉強になりました。政友会の一人の町村長が辞職戦術を駆使することによって県知事に対抗し、事実上県知事の転任にまでいく姿は新鮮でした。結局のところ、一色耕平は私にとっては最も魅力的な人物だったと思います。この研究会は、1983年4月～86年3月まで、月2回、3年間に40回の研究会をもちました。そしてこの研究会は、『社会科学』の特集号を組みましたが、私にとっては、「町村長の発見」の意味があったとおもいます。

#### 4 地域史研究と関西

しかし愛媛は遠い。何回も愛媛に行きましたが、やはり遠い。したがって、研究会では対象を近畿を中心にしてやろうということになりました。1986年4月「地域社会の史的研究—にない手・編成および諸類型—」（代表者井ヶ田良治法学部教授）は京都府丹波・丹後地方、滋賀県湖東・湖北地方、それに愛媛県東予地方を加えて、研究対象地域を関西にもどして研究会が始まりました（なおこの研究会以降人文研の専任研究員が全員参加する研究会はなくなりました）。ついで、1989年4月「地域社会のにない手

の史的研究」が始まりますが、代表者は仲村研先生でしたが、仲村先生は1990年3月58歳でご逝去され、代表者は松本通晴先生になりました。

ところで、これまで研究会は農村部を中心に研究を進めてきたのですが、都市および都市化に伴う諸問題の歴史および現状分析に部分修正をしようということになりました。その結果生まれたのが1992年4月「都市化の研究」という研究会です。もっとも研究会は従来からの農村研究者が多く、なかなか都市研究を中心にできませんでした。私自身がそういう傾向があり、はじめは仲村研先生からの誘いからはじまった自治体史が多くなり、今日まで京都府が3つ、滋賀県が7つ、合計10を数えています。このころは、滋賀県五個荘町の研究をやっているところで、滋賀県の明治前期の村（神崎郡金堂村、約200戸）が集团的行政運営で、村は中層以上の大体50戸程度人数が必要だということ进行分析したりしていました。私個人の意識の中では、これは「村の発見」の時期だと考えています。この研究会の途中で代表者の松本通晴先生がお亡くなりになり、代表者は井ヶ田良治先生に代わりました。

## 5 はじめての研究会代表者

1995年4月、「地域社会変容の史的研究」は青木康容先生が代表者でしたが、96年3月に同志社大学を退職されたので、私が96年4月に代表者になりました。これは、京都市域を主要な対象とし、日本の地域社会がどのように変わっていくか研究しよ

うというものです。ついで1998年4月「地域社会組織の変容」(代表者高久)がはじまりました。いつの時点からか明確に覚えていませんが、研究会代表者は3年ごとに変更する必要があったのですが、このころには代表者の変更は必要ありませんでした。この研究会は、対象地域は京都市域を中心にし、その中で町や町組、公民組合や各種組織がどのように変貌していくかをさぐる、という形になっています。私が京都市域を意識的にやるようになったことは、琵琶湖疏水の研究を本格的にやるようになったことと関係しています。次の2001年4月から始まる「地域社会変容の史的研究—近畿地方を対象に一」(代表者高久)でも京都市域は意識していました。

## 6 最後の研究会—新しい志向—

私にとって最後の研究会が2004年4月から始まり2007年3月で終わる「地域社会の変容と地域開発の史的研究—近畿地方を対象に一」です。これは、近畿地方を対象に地域社会変容の実態研究をめざすことはこれまでの研究会と変わりませんが、少し新しさも追及していて、その中でも地域開発(地域振興)の動きをとり上げる、ということを目指していました。私個人としては、これまで多くの自治体史をやらせていただきましたが、京都宮津間車道など道(とりわけ道幅)の問題に興味がありました。その中で京都府相楽郡南山城村の『南山城村史』という自治体史を執筆する中で驚いたことがあります。この村は三重県上野に向かう

伊賀街道があるのですが、明治前期のこの街道の道幅が大体1間2尺（約2.4m）、この時期の村内13の道の道幅が3～4尺（約0.9～1.2m）でした。あとで、さすがに、他の村の道幅はこれよりは少し広いことがわかりますが、それにしても道幅は本来は狭い。京都宮津間車道の3間（約7.2m）の道幅は都市部を除き、最も広い道幅であることもわかりました。このようにして、「道の発見」も地域史研究の中で味わったことです。

もっとも、これらのことは、私個人の興味で、研究会全体のものではありません。

ともかくも、『社会科学』の特集号を2006年3月に組みました。そして、2007年3月に研究会が終わり、私も同志社大学を退職することになります。

今後、人文研がどうなるか、その良い方向を見ることができたらしいなあと思います。

（付記）当日時間の関係で省略したことをかなり加筆しました

**司会** ありがとうございます。人文研が培ってきた学問の歴史、経緯、ご苦勞がよくわかりました。大学院生時代、高久先生の研究会に所属させていただきました。厳しいコメントをいただいて、落ち込んでいた時、高久先生や田中真人先生にあたたかい励ましをいただいたことを思い出します。小林先生も高久先生の研究会に所属されていました。それではコメントをちょうだいしたいと思います。



## コメント

同志社大学文学部教授 小林 丈 広

高久先生のお話に関連してコメントさせていただきたいと思います。私は1980年代中頃から縁があって京都市史の仕事を手伝うことになりました。京都で仕事をしながら勉強をしていたのですが、京都市史の執筆者の中に田中真人先生がおられたことから、CS（キリスト教社会問題研究）の研究会に声をかけて頂きました。田中先生は博識で話し好きの方で、いろんなことを教えていただき、頼りにしていた先生でした。私の記憶では1989年頃から参加させていただきましたが、その頃は和田洋一先生をはじめ、著名な先生方がおられて、その場に座っているだけで緊張したことを覚えています。

私は地方の国立大学出身でしたが、同志社大学の人文科学研究所といえば、全国的にも知られた人文・社会科学系の研究所で、『留岡幸助著作集』を編集したり、『京都「町」の研究』を仲村研先生が秋山國三先生と共著で出されるなど、それが同志社大学の仕事なのか人文科学研究所の仕事なのか、読者としてはあまり区別もついていなかったと思いますが、日本史研究の拠点と認識していましたので、憧れの研究所といっても良かったと思います。そこに、最初はオブザーバーだったと思いますが、参加をお許し頂いたときは、たいへんありがたく感じたことを覚えています。

参加させていただいた頃は、山室軍平に関する研究会が行われていたと思いますが、しばらくすると天皇制とキリスト教につい

ての研究会が始まり、さらに石井十次の研究会へと共同研究が連続して組織されていきました。これらの研究会の事務局をつとめておられたのが田中真人先生でしたが、田中先生は参加者に対してきちんと分担を決め、たとえば石井十次の研究でしたら石井の日記を、担当者を決めて精密に読んでいくという方法をとられていました。ちょうど研究会にワープロが導入されてきた時期で、入力基準を決めてそれぞれが分担したところを入力してくるといふ、宿題が多い研究会だったのを覚えています。こうして研究会に出入りし始めると、間もなく高久先生が事務局をつとめている研究会にもお誘いいただきました。高久先生は、地域史に関する研究会の中心を担っておられたのですが、私自身が京都市史という仕事で地域史に関わっていましたので、こちらにお誘いいただいたことを本当に嬉しく思いました。また、こう申しては何ですが、高久先生の研究会は厳しい課題を課すことはあまりなく、楽しく参加できるということでホッとできる研究会でした。田中先生の研究会は宿題を済ませないと参加しにくかったので、参加すること自体も緊張しました。ただ、『山室軍平の研究』、『近代天皇制とキリスト教』、『石井十次の研究』と次々に共同研究の成果をまとめられたCSの研究会は、今考えても共同研究のモデルになるものと思います。一方、高久先生の研究会は、そのお人柄もあって、とにかく楽しく参加させていただきました。

このように、私を知る人文科学研究所は、田中・高久両先生の研究会が中心になりますが、研究会に参加させていただきながら、感じていたことを申し上げます。

まず第一に、人文研がこれまで蓄積してきた研究活動や数々の研究成果を振り返ると、その存在は日本の歴史学に関わる研究機関の中でも代表的なもののひとつということができ、その成果は、戦後歴史学の展開の中で大きな貢献をしてきたということができると思います。

もうひとつ感じるのは、人文研ではCSの研究会が次々と共同研究を発表されていたので、地域研究など他の分野を担っていた研究班もその成果から多くの刺激を受けていたのではないかと思います。

それから、これは高久先生のパーソナリティかもしれませんが、究極の共同研究としていわゆる自治体史に大きく貢献されていたということです。これは人文研の公務ではなかったと思いますが、共同研究の苦勞もよくご存知だった高久先生は、そうした共同研究の経験と、くずし字など地方（じかた）文書の読解や史料保存に対するご経験などから、各地の自治体史に引っ張りだこでした。ちょうど日本全国で自治体史が盛んになってきた時期でもあり、近畿でも滋賀県をはじめ各地で編纂事業が展開すると、高久先生は休日などを利用してそれに誠実に向き合われていました。近現代史研究者の中には、問題意識が先行し、自治体史でも自説を展開することに固執する研究者もいるのですが、高久先生はその地域の史料を丹念に読み解くことから対象地域の特徴を浮き上がらせることに専心されたように思います。地域の歴史を研究者の勝手な解釈で切ってしまうことは、研究者として決してあってはならないことですが、地道に史料を収集し、読み込むことは、たい

へん難しいことでもあります。高久先生は常に当該する地域に足を運び、地域に寄り添って考え、史料を読み込むことを心がけていたと思います。また、同僚の田中先生も京都市史や宇治市史に取り組みましたので、こうした地域との向き合い方も当時の人文研の特徴のように感じていました。高久先生は長岡京市や向日市など乙訓地域で市民の古文書勉強会にも関わられ、社会活動にも貢献されていました。

以上のような特徴を持つ、当時の人文科学研究所の地域研究を振り返りますと、戦後歴史学の中での近現代史の研究機関としてたいへん特徴ある研究所だったのではないかと思います。

戦後の日本近現代史研究の歩みを簡単に振り返りますと、1970年頃までの近現代史研究は問題意識先行型で、はじめに理論的な文献などを引用し、研究対象も著名な思想家や自由民権運動や米騒動などといった重要な出来事に集中するなど、新しい史料を使った研究は限られていたように思います。

それに対して1970年代からは、少なくとも当該地域の新聞や雑誌などは読み通して分析し、新しい事実を発掘することが重要視されるようになってきました。また、全国的にも図書館の郷土資料室や京都府立総合資料館のような文書館の整備が始まり、先ほど申しましたような自治体史編纂も盛んになってきましたので、庄屋や村長の家に残る文書類を使った研究も本格化しました。

1990年代になると、近現代史研究の中でも政治家や地方のリーダーが残した日記や手紙などといった一次資料を利用しないと、研究として評価されない時代によくようになってきたと思います。

1990年代になって近現代史研究が実証的になってきました。しかし、考えてみると同志社の人文研は、すでにCS研究では早くから新聞・雑誌を収集してその分析を行うことは当然のこととされており、留岡幸助や山室軍平等といった人物については、遺族や各地に残った手紙や日記の解読を共同作業で行っていました。また、地域研究の分野でも高久先生は、愛媛県の一色耕平の日記や京都郊外の河原林安左衛門の日記など、1980年代にはくずし字の解読に取り組んでいました。これらは、全国的に見ると、近現代史研究の実証的研究の先駆けのような位置にあったといっても過言ではないと思います。

最後に、繰り返しになりますが、人文研はCSの研究から始まる実証的な研究、仲村研先生によって担われていた『京都社会史研究』『京都「町」の研究』などといった成果につながる地域研究の拠点として、私にとっては強く印象づけられていました。本日の高久先生のお話をお聞きすると、その伝統は1950年代までさかのぼるようです。その頃から始まる実証的な社会調査とそれを支える史料調査と整理、目録の作成、こうした作業を踏まえた共同研究の蓄積が人文研の中に育っていたようです。仲村研先生の中近世の研究を踏まえた幕末維新期の研究、杉井六郎先生、高久先生や田中先生、庄司俊作先生などへと受け継がれてきた様々な角度からの日本近現代史研究が人文研の研究の厚みを支えていたのだと思います。それが京都という都市部はもちろんのこと、それにとどまらず、近隣の農村部も踏まえた総合的な地域社会研究になっていた。その意味でも憧れをもって人文研に参加させてい

ただいたと思っております。

私は1990年代から本格的に参加させていただきました。先ほども申しましたように、田中先生、高久先生の研究会の運営は対照的でしたが、それも相まって人文研の魅力になっていました。このお二人に共通するのは、一次史料へのこだわり、史料の読解の中から新しい独自の理論を模索しようという研究スタイルだったのだと思います。私自身、そうした研究姿勢からもっとも多くものを学ばせていただきましたし、理論を不得手とする私のような人間を勇気づけてくださる研究会だったと思います。全国的な学会などに参りますと、特定の理論で権威づけられたものが時流に乗って席卷することはありますが、長続きしないように思います。そういう、世の学界とは一線を画して、人文研は独自の成果を蓄積してきました。学際的な研究機関だからこそ、分野を超えた共通の土台として史料に徹してきたこれまでのあり方から学ぶことが大きいと思います。本日司会をしていただいた奥田先生はじめ、若い研究者の皆さんにも人文研の研究の伝統を引き継いでいていただきたいと思っております。

(付記) 本コメントには言葉足らずな所が多々ありますが、当日の雰囲気を残すため、加筆は最小限にとどめました。ご海容いただけましたら幸いです。

**司会** ありがとうございます。人文研の地域史研究が日本で果たした大きな役割と、それを支えてきた一次資料へのこだわりと

いう重要なご指摘をいただいたと思います。それでは第2部をこれで閉じさせていただきます。高久先生、小林先生、ありがとうございました。